

1-1 哺乳類・爬虫類・両生類

1 調査概要

(1) 調査の目的

伊那谷の東西に聳える中央・南アルプス、中央をほぼ一直線に南下する天竜川とその兩岸の段丘崖・天竜川と東西の山岳の間の市街地や田園地帯…。伊那谷の地形は、このように模式的に表現できる。南北に長くつながるこの地形は、哺乳類・爬虫類・両生類の移動や分布の拡大には、好都合な環境を提供しているように思われる。一般にハクビシンは南から段丘崖にそって、カヤネズミは諏訪と飯田から天竜川河川敷のススキの分布にそって上伊那地方に分布を拡大してきていると言われている。

このように、分布の仕方に流動性があるとすれば、現時点での動物の分布を記録しておくことは、今後その消長をさぐる上で、大切な資料となると考える。本調査では、現時点での動物の分布の様子を記録することを第一の目的とした。

(2) 調査の方法

哺乳類・爬虫類・両生類は、その生息数や密度などの状況から、生息の有無などに関するデータを得にくい。このため、ひたすら調査者が調査地内を移動しながら、目撃や生活痕跡の収集に努めるという方法をとらざるを得ないことが多い。従って、生息数を明らかにしたりすることが比較的困難であるばかりか、生息の有無についても断定できるだけの資料を得ることも難しいことがある。

そうしたなかでも、次に上げる動物の特定のテーマについては、特別な調査方法を用いた。

A ノネズミ類

ノネズミの調査では、従来からシャーマントラップやスナップトラップによる捕獲を行うことがあった。スナップとラップは、捕獲の際、個体を死なせてしまうことになるため、今回調査では、シャーマンとラップを用い、生息の確認後直ちに放逐するようにしながら、大芝森林で生息分布の調査を行った。

B シュレーゲルアオガエル・トウキョウダルマガエル

カエル類は繁殖期に鳴くために、鳥類と同じような鳴き声による判別や分布の確認をすることができる。今回は、シュレーゲルアオガエルの分布を調査するために、夜間、自動車で全域を移動しながら鳴き声を聞くセンサスを行った。

2 調査結果と考察

A 哺乳類

哺乳類は一般に、その移動能力や適応性の高さから、一般に伊那谷に生息するとされているほとんどの種が、南箕輪村内でも生息しているものと予想される。

特に、大型哺乳類は、特定の環境条件の有無によって生息が局限されるようなことがないので、人為的な影響がなければ生息していると見て良いと考えられる。ニホンカモシカは、大泉ダム以南で道路を横切る姿が目撃された。ニホンカモシカは種指定の特別天然記念物だったころは、幼齢植林地には必ずと言って良いほどニホンカモシカが見られたが、

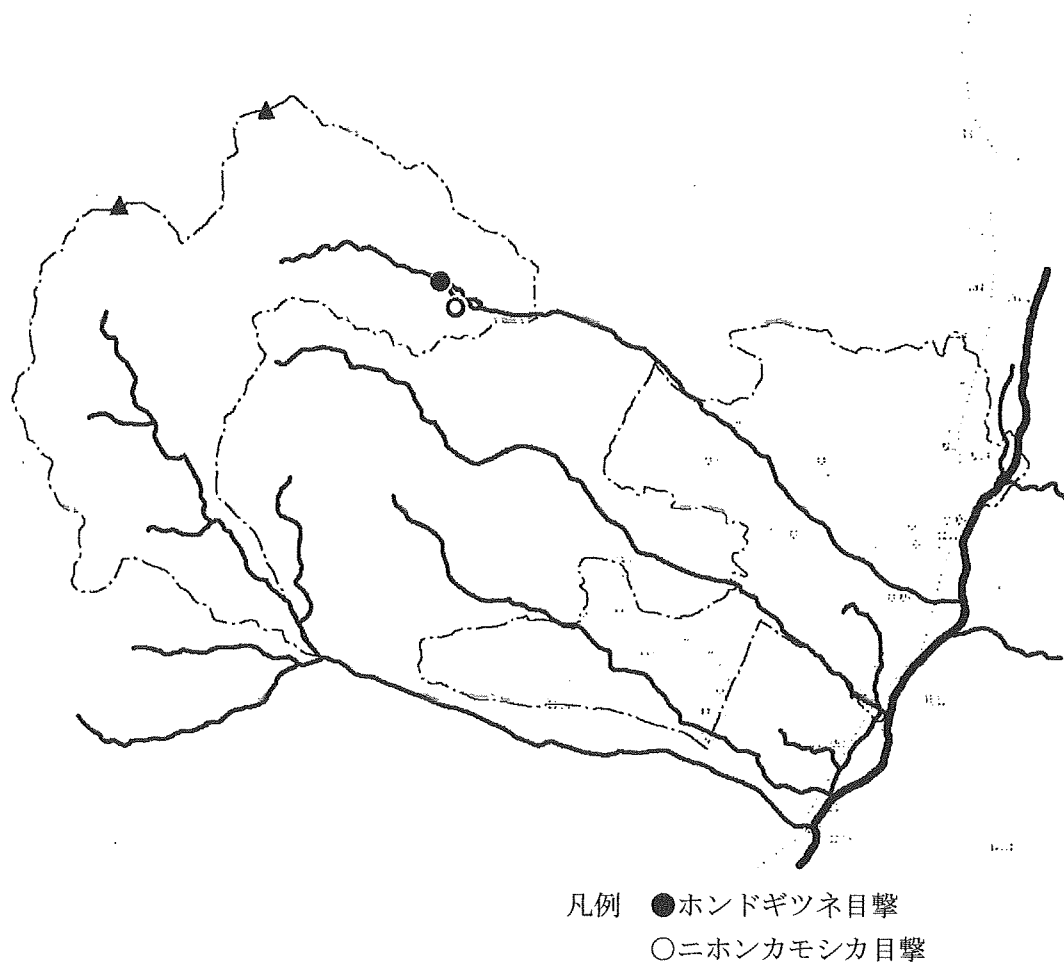


図 大型哺乳類目撃位置図(平成20年6月)

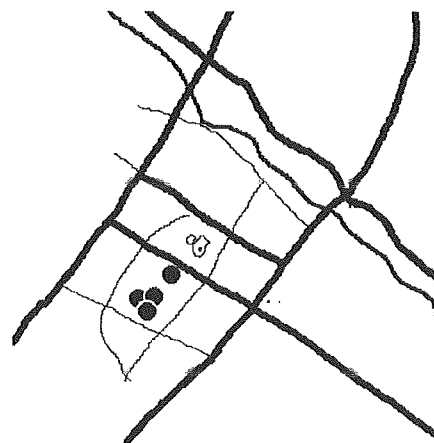
地域指定となつてからは、目撃例がまれとなつてきている印象がある。ニホンツキノワグマは平成21年6月に目撃情報が寄せられた。伊那市の小沢川沿いでは、西部大型農道の小澤橋付近や荒井神社付近まで、小黒川沿いでは同じく西部大型農道が通る大坊地区まで、ニホンツキノワグマが下りてきているのが目撃されているが、南箕輪村内では集落近くでの目撃がない。これは、小沢川や小黒川の両岸には森林が発達しているのに対して、大泉川などでは両岸の森林を伴っていないことがその理由と考えられる。ホンシュウジカは、上伊那郡内では伊那山脈や赤石山脈など盆地の東側の山体での目撃が多く、南箕輪村内では目撃例が寄せられていない。しかし、平成19年には、西春近と東春近の間の天竜川をホンシュウジカが横断するところが目撃されたとの新聞報道があることなどからも、東西の移動は実際にあり、村内での生息を否定することはできない。

中型の哺乳類では、特定の環境条件を必要とする種もある。ニッコウムササビには、巣穴にする樹洞を伴った大木が必要である。上伊那郡内ではこうした大木は、山林内よりはむしろ社寺林などに多く、山林に接した社寺林に多くの分布が確認されている。しかし、

南箕輪村内には山林に接した社寺林がないことから、生息が確認できなかった。この分布については更に調査が必要である。ホンドギツネやニホンアナグマは、地面に巣穴（横穴）を掘って生活する習性がある。そのため、巣穴を掘ることができないような場所では生息がしにくくなる。しかし、地面がコンクリートで一面に覆われたような場所でさえなければ、巣穴を掘ることが不可能ではなく、従って山林周辺に普通に生息しているものと考えられる。ホンドギツネは、大泉ダム上流で目撃することができた。ニホンアナグマは、小沢川を挟んだ伊那市横山で目撃することができているので、南箕輪村内に生息している可能性がある。ただ、征矢が平成10・11・12年度に大芝で調査したところによると、夜間調査や積雪後の足跡調査でもまったく確認ができなかったとのことであり、今回も確認はできなかった。他の中型の哺乳類は、生息を限定するような条件が見あたらない。ノウサギは、権兵衛峠付近で目撃され、各地におびただしい食痕を残している。ホンドタヌキやホンドイタチ、ホンドギツネなどは村内在住のほとんどの方が、夜間などに目撃している。ニホンザルは、塩ノ井の国道沿いの段丘崖で征矢が発見しているほどである。ハクビシンは、天竜川対岸の伊那市・箕輪町の段丘崖で、目撃されていることから生息も十分に考えられるが、確認できなかった。

小型哺乳類では、ニホンリスを大芝森林内で目撃した。また、天竜川西側の段丘崖では、クルミの殻への食痕が多数発見されている。ニホンリスの場合、小枝を荒く敷いた鳥の巣のような巣を、幹に近い枝の根元に造るものの、それに適した樹木は村内全域に普通であり、また、段丘崖や川沿いなどに餌になるクルミなどの果実が豊富にあるため、生息環境として不足がないように思われる。モモンガについては、その生息環境が亜高山帯であるので、経ヶ岳山頂周辺などに生息する可能性もあるが、今回は調査が及んでいない。

ネズミ類では、大芝森林内のシャーマントラップによる調査で、ヒメネズミの生息を確認した。ヒメネズミは、森林での生活に適応した普通に見られるネズミである。そのほか、征矢は平成10・11・12年度の大芝森林での調査で、スミスネズミ、アカネズミの生息も確認している。一方、草原性のハタネズミやススキなどに球巣を造るカヤネズミは確認されなかった。この2種は生息可能な環境がないわけではないので、今後詳細に調査することによって生息が確認される可能性はある。また、ドブネズミ、クマネズミなどの人家近くに生息するネズミは、調査するまでもなく各所で捕獲されたりしている。今回は、大芝で、大芝荘や大芝湖周辺を調査してみたが、ドブネズミなどは確認できなかった。本来森林性の野ネズミの生息地である大芝に、人の生活と関係の深いドブネズミなどがどの程度入り込んでくるか、また、分布の境界線がどのように変化していくか、興味のあるところである。



凡例 ●ヒメネズミ

図 大芝森林内のノネズミ発見
位置図(平成21年10月)

哺乳類フィールドサイン1



ウサギ糞

採集・目撃場所

大泉川上流



リス食痕

採集・目撃場所

大泉川上流



ネズミ科の食痕

採集・目撃場所

大芝森林

哺乳類フィールドサイン2



シカ糞

採集・目撃場所

大泉川上流



モグラ科の巣

採集・目撃場所

大泉川上流

B は虫類

は虫類は、両生類などの餌になる動物が豊富な場所に、石やその他の物の隙間に入りながら生息していることが多い。こうした生活には、水田地帯が格好の生息場所となり得る。このため、普通に上伊那地域で見られるほとんどの種が生息していると考えて良い。

今回の調査では、大泉ダムの下でアオダイショウを発見した。また、移動中などに車にひかれたヤマカガシを見かけることがしばしばあった。このほかに、シマヘビ、ジムグリは多くの人によって生活の中で発見されている。

マムシについては、今回調査では発見できなかった。しかしこれも、村内で生息を限定するような要因が見あたらなことから、当然分布していると見てよい。人の生命や生活につながるだけに、今後できれば詳しい分布や生息密度の高い場所などを調査していくことが望まれる。

C 両生類

両生類の生息には、その生活史から、水辺の環境がどうしても必要である。また、水があっても、都市などで単調なコンクリートの水路だけしかないような場所でも生息はできない。卵や幼体は一般に止水を必要とし、更に水の中に腐葉など餌となる物が必要である。従って、両生類が多様に生息しているような場所は、一般に昆虫などその他の動物の多様性も豊かであると言って良い。

カエル類では、夜間の調査によって、シュレーゲルアオガエルの分布を確認した。シュレーゲルアオガエルの主な生息域は、天竜川西岸の水田地帯と大泉川沿い、そして、大泉ダム下である。上伊那全体で調査したところによると、シュレーゲルアオガエルの典型的な生息環境は、水田がある小さな谷などである。普段樹上で生活するために水辺の樹木などが必要であり、産卵のためには石などを含んで穴などがくさんある田の土手が必要である。

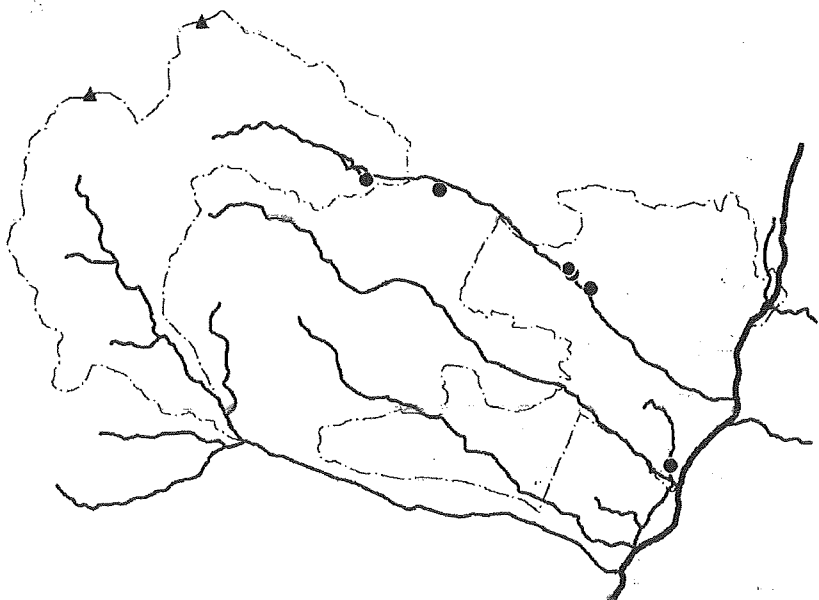


図 シュレーゲルアオガエルの鳴き声分布（平成20年5～6月）た

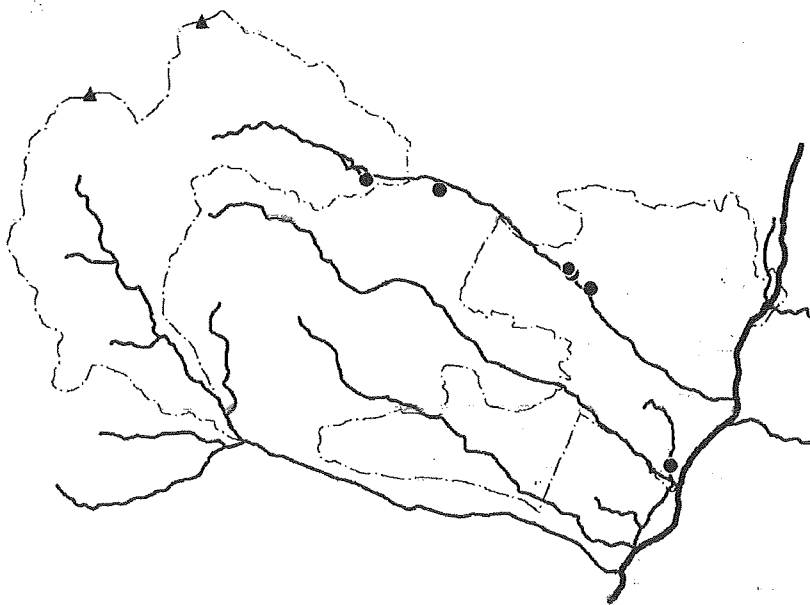


図 シュレーゲルアオガエルの鳴き声分布（平成20年5～6月）た

谷などの水田にはこの環境が揃っている。逆に、西天で灌漑された台地上の水田は、一般に近くに樹木などが泣く、また、長方形に区画され重機で固められた土手には、シュレー

ゲルアオガエルが潜んで産卵するような穴などが無い。同じ水田でも、このように、生息の可否が別れることになる。伊那市でも、富県・手良・高遠地区など、素朴な農村風景が残っているようなところに生息が多いという傾向がある。

シュレーゲルアオガエルと並行した調査で、トウキョウダルマガエルの声も確認することができた。これも、主として天竜川沿いの水田と、大泉川沿いの水田である。また、トノサマガエルのものと思われる声も1カ所で聞いたが、捕獲による確認ができていないので、参考までとする。また、カジカガエルの声を大泉ダムの上で聞いたとの情報も寄せられたが、5～6月の夜間の鳴き声調査では確認できなかったため未確認の情報として記述しておく。

その他のカエル類では、ヒキガエルを小沢川の南沢で確認した。村内ではなかったが連続した山体で隣接した地域であり、村内での確認と同等の意味を持つと考えて良い。ヤマアカガエルとツチガエルは、今回確認できなかったが、上伊那地域で一般に見られる種であることから、南箕輪でも生息してる物と見て良い。また、アマガエルは、通常の生活の中で頻繁に目にし、鳴き声も聞いている。

サンショウウオは、平成10・11・12年度の調査で、征矢がハコネサンショウウオを確認している。今回も、大泉ダムの上の沢でハコネサンショウウオを発見した。比較的大型の個体で、幼体のような全身黒色というものではなく、黄色と黒色の斑模様が見られ、ヒダサンショウウオに似た体色をしていた。しかし、黒い爪が確認でき、溪流の河床に適応したハコネサンショウウオと判明した。

両生類は、他の哺乳類・鳥類・は虫類などの餌となることも多いだけに、両生類の生息の豊かさは、他の動物の豊かさにもつながる意味を持っていると言える。



アマガエル

アマガエル科

採集・目撃場所

荒沢全域



ヤマアカガエル

アカガエル科

採集・目撃場所

荒沢全域



爬虫類

アオダイショウ

ナミヘビ科

採集・目撃場所

中流域(霊園横)



シュレーゲルアオガエル

アオガエル科

採集・目撃場所

中、上流域



爬虫類

シマヘビ

ナミヘビ科

採集・目撃場所

中流域



ニホントカゲ

トカゲ科

採集・目撃場所

中流域